

『経国集』に収録された大神虫麻呂による対策文の詳注の試み

梁 奕華

Annotations of Oomiwanomushimaro's Taisakumon collected in the “Keikokushu”

LIANG Yihua

Abstract

In Jodai (ancient times) of Japan, under the Ritsuryo system (a legal code system which was introduced from China), the employment examination for government officials was held by the Shikibusyo. The employment examination included four subjects called Myogyo (明経), Shusai (秀才), Shinshi (進士), and Myobo (明法). In the examinations of Shusai and Shinshi, questions were given about current affairs or the creed of Confucian classics. The questions were called 'Sakumon' (策問), and the answers to the questions were called 'Taisakumon' (対策文).

Only a few of the taisakumon from Jodai remain in the “Keikokushu” (827), which was compiled by imperial command in the early Heian period.

The taisakumon from Jodai are important texts for learning about the written expressions and thoughts of literati in Jodai. As a basic investigation, this paper is aimed at annotating the taisakumon written by Oomiwanomushimaro, which was collected in the “Keikokushu”.



目次

【概説】

【本文と書き下し】

【現代語訳】

【策問の語釈】

【対策の語釈】

【まとめ】

【概説】

推古十一年（六〇四）に初めて冠位十二階の制定などの国制改革が行われて以来、日本では中国から導入された律令制度の建設が次第に行われてきた。その一環として、官僚育成のための教育機関である大学寮が設置され、官吏登用の国家試験が式部省によって行われた。文武天皇大宝元年（七〇一）に制定・頒布された大宝律令により、官吏登用試験に明経・秀才・進士・明法の四科が設置され、その中で、秀才科と進士科の試験では、それぞれ方略策二条と時務策二条が問われている。上代の状況に則して言えば、「対策文」（あるいは「対策」とは、秀才科と進士科の試験で課せられた問題、すなわち「策問」に対する答案文である）。

上代の対策文は極少数のみ現存しているが、そのうち二十篇ほどが平安初頭に成立した『経国集』（八二七）の残巻に収録されている。『経国集』は慶雲四年（七〇七）から、成立年の天長四年（八二七）に至る百二十一年間の詩文を集める日本最初の勅撰漢詩文集であるが、今日その大部分が散逸している。現存する六巻の中で、巻二十「策下」に奈良・平安の十三人各二篇ずつの計二十六篇が収録されているが、十三人の中で、栗原年足と道守宮繼という二人が平安朝人で、そのほかにはみな上代人である。栗原年足と道守宮繼が答える策問には、後に

編纂された『本朝文粹』（巻三）所収の平安朝の策問と同じく、策問者の官職姓名と、「天地始終」などのような四字の題名が表記されているが、奈良朝の策問には策問者も題名も表記されていない。『経国集』を編纂する際に、奈良朝官人の策問者名や策題がすでに失われていたのか、あるいは、奈良朝の試験がまだ平安朝ほど規範化されず、もともと策題などがなかったのか、それらは定かではない。

『経国集』に残存している上代人の対策文は、いうまでもなく上代の文章表現または上代人の思想を知るのに重要なテキストである。その基礎調査として、本稿では『経国集』に収録された最後の一篇である大神虫麻呂の対策文について詳細な注釈を試みたい。

作者の大神虫麻呂については、『経国集』に収録されている対策文の二篇が現存するほかは、出自経歴などいずれも未詳である。また、対策文の創作時期については、対策文の最後に記録したように、天平五年（七三三）の作で、聖武天皇の在位期間中である。

この対策文の先行注釈としては、小島憲之氏の注釈が『国風暗黒時代の文学・上』と『国風暗黒時代の文学・補篇』（以下『上』・『補篇』と略称する）の二ヶ所に見られるが、二ヶ所の注には食い違う解釈があり、いまだ明白にされない部分も存在する。本稿では、それらの再検討を含めてより詳細な注釈作業を行う。

【本文と書き下し】

底本：『群書類従』巻一二五『経国集』

対校本：三手文庫本（「三」）、神宮文庫本（「神」）

（問）1問、虞舜無為、垂拱巖廊之上、*

周文日昃、広延英俊之人。

2夫帝王之道、條貫豈異。

3何勞逸之不同、而黔黎之懷輯。

4欲使變斯俗於彼俗、化奸吏於良吏、

人民富庶、圉圉空虛、

其術如何。

5悉心以對。

6 神虫麻呂

（一）7對、窃以逖覽玄風、遐觀列辟、*

8結繩以往、鴻荒之世難知、

刻石而還、步驟之蹤可述。*

9至於根英易代、金石變声、

10咸以事藹芸繡、義彰華篆。

11煥焉在眼、若秋旻之披密雲、

粲然可觀、似春日之望花苑。

（二）12當今握襄御俗、履翼司辰。

13風清執象之君、声軼繞樞之后

14設禹麾*而待士、坐堯衢以求賢。

15鼓腹擊壤之民、抃舞於紫陌。

負鼎釣璜之佐、接武乎丹墀*。

16方欲窮姬文日昃之勞、

明虞舜垂拱之逸、

17驅風帝王之代、駕俗仁寿之鄉。

問ふ。虞舜無為にして、巖廊の上に垂拱す、

周文日昃まで、広く英俊の人を延く。

夫れ帝王の道、條貫豈異ならむや。

何ぞ勞逸の同じからざるも、而るに黔黎の懷輯しける。

斯俗を彼俗に變へ、奸吏を良吏に化し、

人民富庶し、圉圉空虛ならしめむと欲せば、

其の術如何。

心を悉して以て對へよ、と。

大神虫麻呂

對ふ。窃かに以みるに、逖く玄風を覽、遐かに列辟を觀るに、

結繩以往、鴻荒の世知り難し、

刻石而還、步驟の蹤述ぶ可し。

根英易代し、金石變声するに至りては、

咸以て、事は芸繡に藹し、義は華篆に彰る。

煥焉として眼に在り、秋旻の密雲を披くが若し、

粲然として觀つ可し、春日の花苑を望むに似たり。

當今、襄を握りて俗を御し、翼を履みて辰を司りたまふ。

風は象を執る君より清く、声は樞を繞る后に軼ぐ。

禹麾を設けて士を待ち、堯衢に坐して賢を求めたまふ。

鼓腹擊壤の民、紫陌に抃舞し、

負鼎釣璜の佐、丹墀に接武す。

方に姬文が日昃の勞を窮め、

虞舜が垂拱の逸を明らめ、

風を帝王の代に驅り、俗を仁寿の郷に駕し、

18 博採芻詞、側訪幽介。

(三)

19 夫以時異浮沈、運分否泰、

20 文質之統茲別、張弛之宜不同。

21 然則四乳登皇運、經三徵之虐政、

重華踐帝世、近二皇之淳風。

22 淳風之時必須垂拱、虐政之世何不經營。

23 是知聖王与世以汚隆、黎庶從君而低仰。

(四)

24 若能追有虞無為之化、則隆周勤已之治、

25 表廉平、宣礼讓、

26 賁帛旌其英俊、懸棒絕其奸回、

27 勸之以耕桑、勗之以德義。

28 則可金科不濫、沙圉恒清、

九歲有儲、千斯積庾、

29 水魚不犯、共喜南風之薰、

門鵲莫喧、咸懷東戸之化。

30 謹對。

31 天平五年七月廿九日

芻詞を博採し、幽介を側訪せむと欲したまふ。

夫れ以みれば、時は浮沈を異にし、運は否泰を分ち、

文質の統は茲に別れ、張弛の宜は同じからず。

然らば則ち、四乳皇運に登るに、三徴の虐政を経き、

重華帝世を踐むに、二皇の淳風に近かりけり。

淳風の時必ず須らく垂拱すべく、虐政の世に何ぞ經營せざる。

是に知りぬ、聖王は世と与に汚隆し、黎庶は君に従ひて低仰す、と。

若し能く有虞無為の化を追ひ、隆周勤己の治に則り、

廉平を表し、礼讓を宣べ、

帛を賁りて其の英俊を旌し、棒を懸けて其の奸回を絶ち、

之を勸むるに耕桑を以てし、之を勗むるに德義を以てせば、

則ち金科濫れず、沙圉恒に清く、

九歲儲有り、千斯庾を積み、

水魚犯さず、共に南風の薰を喜び、

門鵲喧しきこと莫く、咸東戸の化を懷ふべし。

と、謹みて對ふ。

天平五年七月二十九日

《1上》「三」神——山。1晨——吳（晨）の異体字の「昊」の誤写だと思ふ。「三」。2帝「三」神——常。6蟲——忠（右に「本ノ」らしくて読めない記号がある）「神」。7遐「三」神——（延）+既。8述「神」——迷。9根——狼「神」。9英——英（右傍に「莫」とある）「三」、莫「神」。10

藹——藹「神」。10篆——篆「神」。11煥——炳「神」。11旻「三」神——昊。13風清——清（風）の字無し、左傍に「脱字」とある。「三」、清「清」の後ろに欠字）「神」。14麾「神」——虞。15舞「三」神——ナシ。15璜——璜（右に「以朱在上」、左に「璜本」とある）「三」。15墀「三」神——（十）

十）「神」。17王——皇「三」神。18詞「三」神——詞。19浮——浮（右に「淳本」とある）「三」。19浮沈——淳澆「神」。20統「三」神——統。21徵——徵「三」神。24勤「三」神——勤。26旌——旗「神」。26棒「神」——棒。26回——曲「三」。28圍——圍「神」。29咸「三」盛。29戸「三」神——后。《

【現代語訳】

(問) 虞舜は無為にして、朝廷の上に衣を垂れて手をこまぬいたままで、天下は自ずから治まった。周の文王は昼過ぎまで食を取らず、広く人材を集めて、天下はやつと治まった。そもそも帝王の道はなぜ筋道が異なるか、同じはずではないか。なぜ治政の方法に労苦と安逸の差があるのに、民が虞舜や文王のもとに集まってきたことは同じだろうか。また、もしある風俗を別の風俗に変え、悪吏を良吏に改め、人を増やし、民を富ませ、牢を空にしたければ、その方法はなんだろう。心を尽くして答えよ。

(一) 大神虫麻呂がお答え申し上げます。ひそかに考えてみますに、はるかに太古からの奥深い道を使い、歴代の君王に想いを馳せる時、縄を結んで事績を記す時以前は、太古の昔の事として知り難きところですが、封禪を行って石に功績を刻んでより以降は、政治の歩みの跡を述べることができます。顓頊と帝嚳の作った楽曲の「六茎」と「五英」が変り、鐘や磬が演奏する楽曲も変更するように、王朝が交替するにつれて、事績は書籍に記され、義挙は篆刻に表れています。それらの明らかに目の前にある様子は、まるで秋空に厚くて重なった雲をひらくようで、またその明白で鮮やかに見える様子は、あたかも春の日に花園を眺めるようです。

(二) 現今わが天皇は、褒の文字を手の中に握っている舜帝のように世俗を統制し、翼星^{たすきぼし}を足の下に履んでいる堯のように時を支配なされます。その風格は道を取って守る古代の君王よりも清らかであり、その声誉は生誕の折稻妻が北斗の枢星を巡った黄帝よりも優れています。わが天皇は、禹帝のようにさし旗を立てて賢士を待ち、堯帝のように政を聞く衛室に坐って賢才を求められます。古代明君の治世のもののように、飽食して腹鼓をしたり、壤という遊びの道具を打ったりする百姓^{ひやくせい}たちは、みやこのまちで手を打ちながら舞い踊り、また、鼎を背負って殷の湯王に仕える伊尹や、釣りの最中に璜玉を得て周の文王を補佐した呂望などのような天

子を補佐する多くの賢臣は、宮殿で礼法通りに細歩徐行します。そこで今、わが天皇は、周の文王が昼過ぎまで食事を取らずに治政に励んだ苦勞の道を窮めて探究し、有虞氏の舜帝が衣を垂れて手をこまぬくことだけで天下を太平に治めた安逸の道を明らかにしようと思っていらいっしやいます。さらに、気風は古の帝王の治世に追いつけ、世俗は仁徳長寿の里に倣い、薪取りの如き身分の賤しい者からも広く意見を取り入れ、孤高の隠者をも謙虚に訪ねんとお考えなのです。

(三) さて、思うに時には栄枯盛衰の相異があり、運には泰否吉凶の区別があります。礼法の実施に際し繁華・質朴のいずれの範に則るかは、時運により分かれ、また施政の緊張と弛緩のどちらを取るかは、時世によって同様ではありません。そうであるからには、乳を四つ持った文王が帝王となる機運を得たのは、徭役・兵役で度々庶民を召し出した殷の虐政を経たがゆえで、また目に瞳を二つ持った舜が帝王の系譜を継いだのは、伏羲氏と神農氏の治世の淳朴な気風に近かった次第です。舜帝のような気風が淳朴な時には、必ず衣を垂れて手をこまねく無為の政を行い、文王のように虐政を経た後の世では、国の経営に力を尽くさなければなりません。ここで知るのは、君王は時勢の盛衰とともにし、庶民はまた君王に従って浮沈することです。

(四) もし、舜帝の施した無為の政治を追い求め、周朝隆盛時の文王の勤勉を尊ぶ政治を手本とし、清廉・公平の士を表彰し、礼節・謙譲の人を世に知らしめ、賢者を招く束帛で英才の士を標榜し、処刑用の棒を懸けて邪悪の徒を絶ち、また百姓に農耕を奨励し、徳義を以て彼らを援助することができれば、則ち、金玉ほど貴ぶべき法令はその度を過ぎることがなく、牢屋を常に空にして清潔にし、また九年間の食糧と数多の農作物を蓄えることができます。さらに、君臣は水と魚のように睦まじい関係を持ち、舜帝が琴を弾いて「南風」を歌ったように共に太平を謳歌し、また鵲が喧しく鳴くことのない政治清明な御代にめぐり合い、みなは、上古君

主の東戸季子のようなすばらしい教化を心にしみじみと思うようになるでしょう。以上のように、謹んでお答え致します。

天平五年（七三三）七月二十九日

【策問の語釈】

▽策問を二段に分けることができる。

まず、「何勞逸之不同、而黔黎之懷輯」までは策問の前半にあたり、この部分は『漢書』『董仲舒傳』（卷五十六）に記載している、漢の武帝が董仲舒に聞く問題とはほぼ同様である。

盖聞虞舜之時、游_レ於巖廊之上_一、垂拱無為、而天下太平。周文王至_二於日昃_一不_レ暇_レ食、而宇内亦治。夫帝王之道、豈不_二同_レ條共_レ貫與。何逸勞之殊也。

と見える。武帝の質問の大意は、「舜は巖廊の上に遊び、無為にして、天下が自然と治まった。周の文王は、昼過ぎまでも食事を取る時間がなく、国の経営に苦勞して、天下がやっと治まった。そもそも、帝王の道というのは、何で筋が違ふのだろうか、安逸と苦勞との差は何だろう」ということである。武帝の策問に対して、董仲舒はまず舜と文王が各自帝位につくまでの経歴を確認してから、「繇_レ此觀_レ之、帝王之條貫同、然而勞逸異者、所_レ遇之時異也」と、「帝王のとしての道筋が同じだが、しかし苦勞と安逸との差異があるのは、それぞれの遇った時勢が異なるから」と結論づけた上に、さらに孔子の言葉を引用し、「韶_レ尽_レ美矣、又_レ尽_レ善也」、「武_レ尽_レ美矣、未_レ尽_レ善也」_三というように、舜の無為の政治が最も優れていると評価している。この部分は、帝王の道、つまり天皇の持つべき姿勢を理論上から論じること要求する内容である。

また、後半の部分では、民俗の改変、地方官の育成、民生の改善、犯罪の減少などの、具体的な治国方略について問うのである。

1 虞舜無_レ為にして、巖廊の上に垂拱す、周文日昃まで、広く英俊の人を延く。

○無為——「無為而天下治」の「無為」である。古代中国においては、「無為」は最も理想的な統治形態とされていた。『論語』『衛霊公』に「子曰、無為而治者、其舜也。與夫何為哉。恭_レ己、正南面而已矣」と見える。『懷風藻』には、「無為聖德重_二寸陰_一、有道神功輕_二球琳_一。垂拱端坐惜_二歲暮_一、披軒褰簾望_二遙岑_一」（22 紀古麻呂「望雪」）などのように、「無為」「垂拱」などの無為思想に関する表現が見られる。『経国集』に収められた奈良朝の対策文のなかでは、ほかに「混_二車書_一而欣_二無為_一、垂_二衣裳_一而事_二息浪_一」（大日奉首名）、「無為軼_二於觀象_一、有道籠_二於垂衣_一」（刀利宣令）とある。

○垂拱——「垂衣」と「拱手」との併称、衣を垂れ、手をこまぬくこと、「無為」の喩。『尚書』『武成』の「惇_レ信明_レ義、崇_レ德報_レ功、垂拱而天下治」を出典とする。

○巖廊——原意としては、高くて険しい廊下・ひさしをいう。「巖」は巖峻。「董仲舒伝」にある「虞舜之時、游_二於巖廊之上_一」について、唐の顔師古は後漢の文頴と晋の晉灼の注を、「文頴曰、巖廊、殿下小屋也。晉灼曰、堂邊廡、巖廊、謂_二巖峻之廊_一也」と、それぞれ引用してから、「晉說是也」と判断した。だが、後に「巖廊」は、「巖峻」かどうかと関係なく、宮殿・朝廷をいうようになってきた。加藤有子氏の考察（『「巖廊」考』、『懷風藻研究』四、一九九九年四月）によると、『漢書』以降の六朝の史書や文章では、「垂拱巖廊」の表現が帝の政治の在り方を示す表現様式となり、「巖廊」が「朝廷」をいうことは通常の用いられた方となってきた。後に書かれた『懷風藻』の序文にも、天智天皇の治世を賛美する文句として「旒紘無_レ為、巖廊多_レ暇」と見える。奈良朝においても、「巖廊」が「朝廷」として理解され、「巖廊」に遊ぶという帝王の在り方が優れた政治として見なされていたと知れる。

○日昃——昼過ぎ。未の刻。午後一時から三時まで。ここでは、周の文王が昼食を食べずに昼過ぎまで働く故事をいう。「昃」はかたむく。

『尚書』「無逸」に「文王……自朝至于日中、昃、不遑暇食、用咸和萬民」とある。『後漢書』(卷六十六)「陳元傳」に「文王有日昃之勞、周公執吐握之恭」とある。『続日本紀』「天平三年(七三二)十二月乙未(二十二)」の条に、聖武天皇の詔に「朕、君臨九州、字養萬姓、日昃忘膳、夜寐失席」とある。

○広延英俊之人―広く人材を招く。「英俊」は、秀で優れる、また、その人。『藝文類聚』(卷十二)「帝王部二・周文王」に「帝王世紀曰、文王昌、龍顏虎肩、身長十尺、胸有四乳、敬老慈幼、晏朝不食、以延四方之士」と、文王が夕方まで食事せずに、人材を招いた話が見られる。小島氏の指摘通り、「董仲舒伝」に「故廣延四方之豪雋、郡國諸侯公選賢良修習博習之士」とある。そのほか、王褒「聖主得賢臣頌」(『文選』卷四十七)に「是以嘔喻受之、開寬裕之路、以延天下之英俊也」と見える。

2 夫れ帝王の道、條貫豈異ならむや。

○條貫―すじみち。「貫」は筋が貫き通る意。『史記』「屈原列傳」に、「明道德之廣崇、治亂之條貫」と見える。

3 何ぞ勞逸の同じからざるも、而るに黔黎の懷輯しける。

○黔黎―たみ、庶民、百姓。「黔首黎民」の略。「黔」はくろい。『說文解字』(卷十)に、「黔、黎也。从黑今聲。秦謂民為黔首、謂黑色也。周謂之黎民」とある。『史記』「秦始皇本紀」に「更名民曰黔首」と見え、裴駟集解に「應劭曰、黔、亦黎黑也」とある。後に「黔首」も「黎民」も庶民の通称として用いられる。賈誼「過秦論」(『文選』卷五十一)に「於是廢先王之道、燔百家之言、以愚黔首」、潘岳「河陽縣作」(同書卷二十六)に「黔黎竟何常、政成在民和」とある。『続日本紀』元正天皇「養老五年(七二二)二月癸巳(十六)」の詔に「身居紫宮、心在黔首」と見える。

○懷輯―『漢書』(卷四十)「周勃傳」に「吳王素富、懷輯死士久矣」、

顏師古注に「輯、與集同」と、『晋書』(卷四十二)「王濬傳」に「懷輯殊俗、待以威信、蠻夷徼外、多來歸降」などに見える。これらの用例から見れば、「懷輯」は元來他動詞として、「なつて呼び集める、手懷ける」意である。そうすると、「黔黎之懷輯」の「之」は倒置を提示する役割を持つている助詞である。つまり、強調表現のため、「之」を動詞と動詞の前に倒置した目的語との間に置くという用法である。もとは動詞+目的語というような構造だが、倒置の後は目的語+之+動詞というようになる。倒置の「之」は「之」ではなく「之れ」と訓読するのが一般的であり、この句は「何ぞ勞逸の同じからざれども、而るに黔黎を之れ懷輯するか」と訓むべきで、なぜ治政の方法に労苦と安逸の差があるのに、民を手なづけ集めることが同じくできるのだらう、という意味である。ただ、対句を慣用するという当時の対策文の特徴を含めて見れば、そもそも策問者が「懷輯」を自動詞として「あつまる」の意に誤解したとも考えられる。【書き下し】と【現代語訳】のところでは、自動詞の意を採って解釈したのである。

▽小島注では、「夫帝王之道、條貫豈異、何勞逸之不同。而黔黎之懷輯、欲使變斯俗於彼俗、化奸吏於良吏、人民富庶、囹圄空虛、其術如何」と、「何勞逸之不同」を「條貫豈異」の後ろに付け、「而黔黎之懷輯」での「而」を順接関係に取った。だが、私見としては、「何勞逸之不同」は後ろの「而黔黎之懷輯」との関係がより緊密であり、「而」を逆接関係に取るべきだと考える。対句表現から見ても、
 「夫帝王之道。何勞逸之不同。人民富庶。囹圄空虛。」
 「夫條貫豈異。而黔黎之懷輯。欲使化奸吏於良吏。而黔黎之懷輯。」
 としている。

4 斯俗を彼俗に変へ、奸吏を良吏に化し、人民富庶し、囹圄空虛ならしめむと欲す。

○変斯俗於彼俗、化奸吏於良吏―小島注「補篇」で提示したように、「変」と「化」の対は、「董仲舒傳」で王者の樂に関する対策にも「樂者所下以變民風、化民俗也。其變民也易、其化人也著」と見ら

れる。ただし、この二句は、律令制度の建設についていう文句かと思われる。律令制建設が単に、上部構造の政治・法律の諸制度などに変化をもたらすだけではなく、民衆の日常生活にまで影響を及ぼすことであるゆえに、ここで「民俗を変える」というのではないかと考えられる。また、後の平安朝では、善政を施す地方官を「良吏」、「良二千石」（漢代の郡の太守の年俸が二千石であったことによる）と呼ぶ。国司制度が国家の政策を地方まで貫く基本として、中央集権的な律令制における礎石的な一環である。律令制を根幹的に支えた班田収授制は、戸籍の作成、田地の班給、租庸調の収取などから構成されている。これらはいずれも国司の職務である。律令制の理念を全国に貫徹することが国司に求められるのである。律令制においては、国司が重要な位置に置かれるために、ここで「良吏」の育成について質問するのではないかと考えられる。ここから律令制建設への関心が読み取れるのではないか。

○**圜空虚**——牢獄が空虚になる。国がよく治まっている喩。『文選』（卷五十一）東方朔「非有先生論」に「國無災害之變、民無飢寒之色」、家給人足、畜積有餘、**圜空虚**、呂向注「**圜**、獄也。虚、空、謂、無囚人」と見える。また小島注の指摘通り、「董仲舒傳」に「成康不_レ式、四十餘年天下不_レ犯、**圜空虚**」と見える。

【対策の語釈】

7 窃かに以みるに、**逖**く玄風を覽、**遐**かに列辟を觀る。

○**逖覽**——はるかに望む。「逖」は「遠い、遙か」の意。司馬相如「封禪文」(『文選』卷四十八)に「歷_二選列辟_一、以迄_二於秦_一。率邇者踵_レ武、**逖**聽者風聲」、李善注「**逖**、遠也」と見え、「逖聽」は「はるかに聞く」意。「逖覽」なら、用例が極少数しか見当たらない。やや時代が下ると、『文苑英華』に収録された賦に、張叔良(『全唐詩』に「登廣德二年(七六四)進士第」とある)「五星同色賦、以(昊天有成命)為韻」に「**逖**覽_二傳記_一、**遐**徵_二休咎_一」とあり、張嗣初(同書に「貞

元八年(七九二)進士」とある)「**郷**老獻賢能書賦」に「**逖**、覽虞舜、稽_二古唐堯_一」とある。

○**玄風**——深遠な道。「文選序」に「式觀_二元始_一、眇觀_二玄風_一」、張銑注「言用視_二太初_一、遠見_二玄風_一」と見える。また、老莊の道をさす場合も多い。沈約「宋書謝靈運傳論」(『文選』卷五十)に「在_二晉中興_一、玄風獨扇、為_レ學窮_二于柱下_一、博_レ物止_二乎七篇_一」、張銑注「玄、道。扇、盛也。柱下、謂老子為_二周柱下史_一、制_二道德經五千言_一、博大也。七篇、謂莊周著書內篇有_レ七也」とある。さらに、天子の教えをいう用例も見られる。庾亮「讓中書監表」(『文選』卷三十八)に「弱冠濯纓、沐浴玄風」、呂延濟注「玄風、道教。言遂因_二親寵_一、重辱_二非常之任_一。弱冠、二十也。濯纓、入仕也。言少登_二仕宦_一、沐_二浴天子道教_一」とみえる。この対策文では、「文選序」と同様で、太古を振り返ってみることをいうので、奥深い道で理解すればよいだろう。

○**遐觀**——はるかながめる。遠方を眺める。陶淵明「歸去來兮辭」(『文選』卷四十五)に「策扶_レ老以流憩、時矯_レ首而遐觀」と見える。時代が降るが、同じく『経国集』に収録されている、「宗廟禘祫」と題した栗原年足の延暦二十(八〇二)年の対策文の冒頭は「竊以、遐觀_二曩冊_一、想_二太易之初_一、歷討_二綿書_一、尋_二混元之始_一」となっている。

○**列辟**——歴代の天子。「辟」は君。前掲の司馬相如「封禪文」に「歷_二選列辟_一、以迄_二於秦_一」、李善注「文穎(『漢書』注)曰、選、數也、辟、君也」とある。何晏「景福殿賦」(『文選』卷十一)に「歷_二列辟_一而論_レ功、無_二今日之至治_一」、張銑注「辟、君也。言歷_二觀書記_一、列_二古之賢君_一、而論_二功德_一、亦無_二如_二魏之所_レ治也」とある。

▽この冒頭に類似する表現は漢籍には数多く見られる。前掲「文選序」「式觀_二元始_一、眇觀_二玄風_一」のほか、駱賓王の「**對策文三道**」(『駱丞集』卷三)にも「遐觀_二素論_一、眇觀_二玄風_一」とある。また、上代日本の文章にも散見する。同じく『経国集』に収録

されている下毛野虫麻呂の対策文に「眇觀^二列辟^一、繞電履翼之皇。逖聽^二風声^一、洞八連^三之帝^二」と見え、また後に作られたものだが、『続日本紀』「天平宝字二年（七五八）八月庚子朔」僧綱の上表に「逖察^二前微^一、緬鏡^二遐載^一」とあり、「懷風藻序」の冒頭に「逖聽^二前修^一、遐觀^二載籍^一」と見える。

8 結繩以往、鴻荒の世知り難し、刻石而還、步驟の蹤述ぶ可し。

○結繩—なわを結ぶ。文字のない上古の時、結繩によって政や契約などを記録するとされている。『周易』「繫辭下」に「上古結繩而治、後世聖人易之以書契」と見える。孔安国「尚書序」に「古者伏羲氏之王^二天下^一也、始畫^二八卦^一、造^二書契^一、以代^二結繩之政^一、由^レ是文籍生焉」と見える。孫綽「喻道論」(『弘明集』卷三)「結繩之前、陶然太和」とある。同じく『経国集』「策下」に収録された天平寶字元年(七五七)の策問に「上古淳朴、唯有結繩。中葉澆醜、始造書契」とある。

○以往—単独で使用される時に、「昔、以前」の意、「悟以往之不諫」という陶淵明の「帰去来兮辞」が一例としてあげられる。「○○以往」と使われる時、「○○以降」「○○以来」「○○よりのち」という意味になるのは一般的である。例えば、『史記』「刺客列傳・荆軻」に「酒酣以往、高漸離擊^レ筑、荆軻和而歌^二於市中^一」とある。それと同時に「○○以前」の意味も持っている。この対策文では、「結繩以降」の意味で取れば、文脈に合わず、「結繩以前」の意を取るべきである。魏收「釋老志」(『廣弘明集』卷二、『魏書』出)に「大人有^レ作、司牧生^レ民、結繩以往、書契所^レ絶」とあるのは、本対策文の用法と同様だと考えられる。劉藏器(唐高宗、御史)の対策文(『文苑英華』卷四百九十八「刑法下・恤刑」)では、「結繩以往、闕^二文字^一而不^レ傳、觀跡以來、煥^二圖書^一而可^レ矚」^二とあり、本対策文と近い一例である。

○鴻荒—「鴻」は「大」、「荒」は「蒙」、大いに暗い意。未開な様子、転じておおむかし・太古をいう。謝靈運「三月三日侍宴西池」(『藝

文類聚』卷四「歲時部中」)の冒頭に「詳觀^二記牒^一、鴻荒莫^レ傳」とある。

○刻石—古代では、重要な出来事や功績を石に刻むことによって後世に伝えようとするのである。『史記』「秦始皇本紀」に、「二十八年、始皇東行^二郡縣^一、上^二鄒嶧山^一。立^レ石、與^二魯諸儒生^一議、刻^レ石頌^二秦德^一。議^下封禪望^二祭山川^一之事^上。乃遂上^二泰山^一、立^レ石封祠祀。……禪^二梁父^一、刻^二所^レ立石^一」と見え、封禪のような大きな功績を石に刻むことである。また、『藝文類聚』(卷三十九)「封禪」に、「孝經序金決曰、封^二乎太山^一、考績燔燎、禪^二乎梁父^一、刻^レ石紀^レ功」などとも見える。この対策文では、封禪のことをいうのではないかと思われる。本対策文に少し遅れるが、同じく『経国集』に収録された、天平寶字元年(七五七)の策問に「上古淳朴、唯有^二結繩^一。中葉澆醜、始造^二書契^一。是知三五^レ經由^二文垂^一教、未^レ審七十二君何字刻^レ石」と、またこの策問に答える紀真象の対策文に「萬八千歲、盤古之際難^レ詳。七十二君、皇極之猷^レ可^レ驗。刻^レ石紀^レ號、禪^二云亭^一以騰^レ英。展^レ采觀^レ風、登^二嵩岳^一而傳^レ跡」と見える。ここでの「七十二君」は、封禪を行ったと伝わっている七十二名の君王のことである。『史記』「封禪書」に「桓公既霸。会^二諸侯於葵丘^一、而欲^二封禪^一。管仲曰、古者、封^二泰山^一、禪^二梁父^一者、七十二家、而夷吾所^レ記者十有二焉」と見られる。紀真象の対策文では、「刻石」は封禪のことをさすと知れる。同時代の対策文を踏まえて考えれば、本対策文においても「刻石」を封禪として理解してよからう。

○而還—漢籍では用例が未見、「而來」「以来」の意か。同じく『経国集』に収録された上代の対策文では「但結繩以往、杳然難^レ述。書契而還、炳焉可^レ談」と見られる。(白猪広成か船沙彌麻呂の対策文か不明。内容から見れば、白猪広成のものだと思われる。)また、前掲平安朝の栗原年足の対策文には「遐觀^二曩冊^一、想^二太易之初^一、歷討^二綿書^一、尋^二混元之始^一。太昊少

吳[・]以往、既樸略而未^レ聞。高陽高辛、還[・]漸昭彰而可^レ見とある。「○
○以往……○○而還」というような表現は類型化すると見える。

○歩驟——「驟」は疾走。「歩驟」は歩むことと走ることを、転じて、物
事の進み具合をいう。『後漢書』(卷三十五)「曹褒傳」に「且三五
歩驟、優劣殊^レ軌」とあり、李賢注には『孝經鉤命決』(緯書)が
引用され、「孝經鉤命決曰、三皇歩、五帝驟、三王馳。宋均注云、
歩、謂[・]德隆道備、日月為[・]歩。時事彌順、日月亦驟。勤思不^レ
已、日月乃馳。是優劣也」と見える。三皇・五帝・三王の政を進め
る状況がそれぞれ違うという。薛道衡「老氏碑」(『文苑英華』卷
八百四十八)に「皇王有[・]歩驟之殊」、民俗有[・]淳醜之變」とある。
また、小島注であげられた長孫無忌の「進五經正義表」(『全唐文』
に「雖[・]歩驟不^レ同、質文有[・]異」も一例である。時代が遅れるが、
『続日本紀』の編纂を初めて完成した時、藤原繼繩らの拜表に「故
墳典斯闡、歩驟之蹤可^レ尋」(『類聚國史』卷一四七「國史」「延暦
十三年(七九四)八月癸丑(十三)」と見える。

○可述——「神」本に従って「述」と改めたが、底本では「迷」に作っ
ている。「刻石」を封禪として解釈したら、「迷」でも通じる。一般
的には、上古で封禪した君王が封禪に用いた文章の内容が知られ
ていないので、「石に刻んで封禪を行った七十二名の君王の政治上
の歩みは、やはり知りがたく、人を迷わせる」という意味になる。
ただし、この場合、「可迷」ではなく、「応迷」のほうが自然である。
「応」は推量を表す副詞でもあるが、「可」はその意味を持っていない。

9 根英易代し、金石変声す。

○根英易代——「根英」について、小島氏は『上』に「根と花」と解釈
し、『藝文類聚』「總載帝王」(卷十一)にある「禮斗威儀曰、帝者
得[・]其根核、王者得[・]其英華」を挙げている。だが、「根英」は「莖
英」、つまり上古の五帝の中での顓頊と帝嚳が作った楽曲の「六莖」
「五英」(一説には「五莖」「六英」の併称ではないかと考えられる。
『漢書』(卷二十二)「禮樂志」に「昔黃帝作[・]咸池、顓頊作[・]六莖、

帝嚳作[・]五英、堯作[・]三章、舜作[・]招、禹作[・]夏、……(中略)
五英、英華茂也。六莖、及[・]根莖也。咸池、備矣。自[・]夏以
往、其流不^レ可^レ聞已」と見える。時代がやや遅れるが、王起
(七六〇)の「宣尼宅聞金石絲竹之聲賦、以聖德千祀・發於

五音為韻」(『文苑英華』卷七十八)に「固可[・]掩[・]歌鐘於二四、
配[・]莖英於三五」と見える。つまり、「根英」は「莖英」の「莖」
を「根」に入れ替えた言葉である。『文苑英華』(卷四百八十、「賢
良方正科」)に収録された対策文に「雖[・]根英異[・]轍、火木殊[・]途、
革[・]去故[・]而鼎[・]就[・]新、變[・]咸池[・]而歌[・]大夏、然而無[・]易[・]茲典、
其故何哉」と見える。この対策文の作者について、『文苑英華』
では「闕名」と記され、『全唐文』では蘇晋(六七六〜七三四)
の作とされる。ほかに、宋代の胡宿「代中書詔定大樂名議」(『文
恭集』卷八)に、「若顓頊題[・]根英之文、陶虞紀[・]明紹之美、
三王殊[・]憲、稱謂炳焉」と見える。次の「金石変声」も音楽関
係の表現なので、「根英」はやはり「莖英」と解すべきである。
昔、新たに天下を取った者は、必ず新しい楽を作って、天地鬼
神を祭って奉告するのである。「根英易代」はつまり、顓頊の
作った「六莖」から帝嚳の作った「五英」に変わるように、王
朝が交替することを意味する。また、後に『三代実録』「貞觀
元年(八五九)四月十五日庚子」にも「朕聞、自[・]古體[・]元居[・]
正者、雖[・]運殊[・]根英、聲別[・]中[・]金石、莫[・]不[・]改[・]正朔[・]變[・]徽章、
以易[・]中[・]民之視聽[・]也」と見える。

○金石変声——同じく王朝の交替をいう。「金石」は、ここで鐘や
磬の類の楽器をいう。『周礼』「春官・大師」に「皆文之以[・]五聲、
宮・商・角・徵・羽。皆播[・]之以[・]八音、金・石・土・革・絲・木・匏・
竹」、鄭玄注「金、鍾・鐃也。石、磬也。」と見える。司馬相如「上
林賦」(『文選』卷八)に、「蓋象[・]金石之聲、管籥之音」とある。
「金石変声」は「根英易代」と同様、王朝交替によって演奏す
る曲も変わる意。ただ類似する表現は、後の宋代の夏竦「奉和
御製讀宋書」(『文莊集』卷三十一)にある「金石終[・]移[・]律、山

河始誓_レ功_」、自注「史臣曰、至于金石、變_レ聲、柴火改_レ物_」という一例しか見当たらない。

10 事は芸縑に藹し、義は華篆に彰る。

○事藹芸縑——出来事が書籍に盛んに記載される意。「藹」は草木の茂るさまを原意として、張協「七命」(『文選』卷三十五)に「摺紳濟濟軒冕藹藹」、李善注「廣雅曰、藹藹、盛也」とあるように、植物以外のことも「藹」で形容できる。「芸縑」は書物、書籍のことである。「縑」は書画の用に供する細密な絹。「芸」は一種の香草、書物に入れて虫を防ぐ。『藝文類聚』「草部」に「芸香」の部門が立てられ、その香りを詠む典故詩文が載っているが、書物に入れて虫を防ぐ効果が言及されていない。『初學記』に至っては「官部下・祕書監」に「芸臺」という言葉の典拠を「魚豢『典略』曰、芸香辟_レ紙魚蠹_」、故藏書臺稱_レ芸臺_」とし、芸香の効用が言及されている。楊炯の「登秘書省閣詩序」に「命_レ蘭芷之君子_」、坐_レ芸香之秘閣_」とあり、「芸香の秘閣」は藏書閣の類をいうのである。「芸縑」の用例は中国の詩文では見当たらない。同様な意味の「芸帙」「芸編」なら、早くとも宋代から見られるのである。宋・陸游「夏日雜題」(『劔南詩藁』卷四十六)に「天隨手不_レ去_レ朱黃_」、辟蠹芸編細細香_」、明・劉嵩「呂煥文挽詩」(『槎翁詩集』卷五)に「故牀芸帙在、新塚蔓叢深_」などあげられる。

○義彰華篆——義は美しい篆刻によって明らかに表れる。「彰」は明らか。「呂氏春秋」(卷十四)「孝行覽・義賞」に「賞罰之柄、此上之所以使_レ也。其所_レ以加_レ者義、則忠信親愛之道彰_」とあり、高誘注「彰、明也_」と見える。「篆」は書体の名。「華」は美称。「義彰華篆」は、義挙を美しい篆字で石碑などに刻み現わすという意。

11 煥焉として眼に在り、秋旻の密雲を披くが若し、粲然として観つ可し、春日の花苑を望むに似たり。

○煥焉——明らかなさま。「煥」は火のひかり。『漢書』(卷六)「武帝紀」

の賛に、「興_レ太學_」、脩_レ郊祀_」、改_レ正朔_」、定_レ曆數_」、協_レ音律_」、作_レ詩樂_」、建_レ封禪_」、禮_レ百神_」、紹_レ周後_」、號令_レ文章_」、煥焉可_レ述_」とあり、武帝の功績が明らかに記述に値するという意で、本対策文の用法と似ている。そのほか、司馬相如「大人賦」(『史記』「司馬相如列傳」)に「莅_レ颯卉翕、燿_レ至電過兮、煥然霧除、霍然雲消_」とあるように、「煥然」はさらりと去って明らかになる様をいう。前掲劉藏器の対策文にある「結繩以往、闕_レ文字_」而不_レ傳、觀跡以來、煥_レ圖書_」而可_レ矚_」も、文字の記録によって歴史の歩みが明らかだという一例である。

○秋旻——秋空。『說文解字』に「旻、秋天也_」とあり、『爾雅』にも「春為蒼天、夏為昊天、秋為旻天、冬為上天_」とある。張説「奉和聖製千秋節宴應制」に「槩杖洗_レ清景_」、磬管凝_レ秋旻_」と見える。底本「昊」に作るが、「三」「神」本によって改めた。

○披密雲——厚い雲を開いて退ける。謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首・王粲」(『文選』卷三十)に「排霧屬_レ盛明_」、披雲對_レ清朗_」、李善注「盛明・清朗、喻_レ太祖_」也。王逸晉書曰、樂廣為_レ尚書令_」、衛瓘見而奇_レ之、命_レ諸子_」造焉、曰、每見_レ此人_」、瑩然若下開_レ雲霧_」之觀_」青天_」と見える。李善注では樂広の故事が引かれている。また、漢徐幹「中論」(卷下)「『見在書目錄』に見られる」「審大臣」に「文王之識也、灼然若_レ披_レ雲而見_レ日_」、霍然若_レ開_レ霧而觀_レ天_」と見える。「密雲」は厚い雲、曹攄「思友人」(『文選』卷二十九)に「密雲翳_レ陽景_」、霖潦淹_レ庭除_」と見える。

○粲然——「煥焉」と同じ、明らかなさま。「文選序」に「故風雅之道、粲然可_レ觀_」、呂延濟注「粲然、喻_レ明白_」也_」と見える。『藝文類聚』(卷十二)「帝王部二・漢武帝」に荀悦の「漢紀」が引かれ、「先王之風、粲然存矣_」とある。前掲『続日本紀』の編纂を完成した時、藤原繼繩らの拝表に「前史所_レ著、粲然可_レ知_」とある。ちなみに、前掲『経国集』に収録された対策文では「但結繩以往、杳然難_レ述。書契而還、炳焉可_レ談_」と見え、「炳焉」

も「煥焉」「燦然」と同様で、明らかさまをいう。

12 當今、褰を握り俗を御し、翼を履み辰を司りたまふ。

○握褰―舜の手中に「褰」(褰の異体字)の字の文様があったという故事。『藝文類聚』(卷十一)「帝王部・帝舜有虞氏」に引用された『孝經援神契』には「舜、龍顏、重瞳、大口、手握褰」(宋均)注「握褰、手中有褰字、喻從勞苦起、受褰飾、致中大位上也」とある。「握褰」は、労苦から起こり、褰美されて、大位を致す意という。

○御俗―習俗を制御する。世俗を統制する。鄒陽「獄中上書自明」(『文選』卷三十九)に「是以聖王制世御俗、獨化於陶鈞之上」とある。『経国集』「策下」に収録された船沙彌麻呂の対策文では、策問に「帝王御世、必須賞罰」、対に「臣聞、聖帝臨民、明王御俗」とある。

○履翼―小島氏は『補篇』で翼星の運行を履行することかと推測したが、『上』では周稷の故事を踏まえた表現だと推測した。この二説とも賛同しかねる。『宋書』(卷二十七)「符瑞上」に「帝堯……眉八彩、鬚髮長七尺二寸、面銳上豐下、足履翼宿」と見える。「翼」は翼宿、星座名、二十八宿の一つ。「履翼」は、「握褰」のように、堯の足のうらに翼星の文様があることをさすのではないかと考えられる。『大慈恩寺三藏法師伝』に収録された三藏法師の「謝御書大慈恩寺碑文表」に「伏惟陛下履翼乘樞、握褰纘運、追軒邁項、孕夏吞殷」とある。前掲下毛野虫麻呂の対策文に「眇觀三列辟、繞電履翼之皇。巡聽風声、洞八連三之帝」と見え、また大日奉首名の対策文にも「就日望雲之帝、握褰履翼之王」と、「握褰」と「履翼」が併用されている。

○司辰―昏明をつかさどる。時を支配する。禰衡「鸚鵡賦」(『文選』卷十三)に「若迺少昊司辰、蓐收整轡、嚴霜初降、涼風蕭瑟、李善注「禮記曰、孟秋之月、其帝少昊、其神蓐收」と見える。

13 風は象を執りける君より清く、声は樞を繞りける后に軼ぐ。

○執象―道を取って守る。『老子』(卷上)「三十五章・仁德」に、「執大象、天下往」とあり、河上公注「執、守也。象、道也。聖人守大道、則天下萬物移心歸往之也」、王弼注「大象、天象之母也」と見える。「象」は道、「ものの形」の「像」の仮借として用いられる。蘇頌「御史大夫贈右丞相程行誨神道碑」(『文苑英華』卷八百八十九)に「聖皇執象、增天報功。元老協斯、捧日疇貴」とある。

○声軼―声譽が〇〇よりすぐれている。「軼」はすぎる。班固「典引」(『文選』卷四十八)に「光揚大漢、軼聲前代」、劉良注「軼、過也」と、逆順の「軼聲」が見られる。「聲軼」なら、嚴識玄(中宗)「潭州都督楊志本碑」(『文苑英華』卷九百十二)に「自吳飛楚、聲軼湛盧。從趙入秦、價先和氏」と見える。

○繞樞―稻妻が北斗の樞星をめぐる。黃帝が誕生する時の天候。転じて、聖人帝王誕生の兆し、吉兆をいう。『藝文類聚』(卷十)「符命部」に「帝王世紀曰、電光繞北斗樞星、照郊野、感符寶」、孕二十月、生黃帝於壽丘」と見える。沈約「光宅寺刹下銘」(『藝文類聚』卷七十七)に「壽丘靈變、電繞樞光、周原撫膺、五緯入房」とある。常袞(七二九〜七八三)「中書門下賀慶雲見表」(『文苑英華』卷五百六十二)に「色涵流渚之虹、影雜繞樞之電」と見える。前掲下毛野虫麻呂の対策文にも「眇觀三列辟、繞電履翼之皇」と、この典故が用いられている。

○后―きみ、天子。張衡「東京賦」(『文選』卷三)に、「惟我后能殖之以至和平」、方將數諸朝階、薛綜注「后、帝也」と見える。

14 禹麾を設けて士を待ち、堯衢に坐して賢を求めたまふ。

○禹麾―禹のさし旗。『楚辭』「大招」に「直羸在位、近禹麾、只直

嬴位に在り、禹^レ魔に近し」とあり、王逸注「禹、聖王明^二於知^一人。魔、
 挙^レ手也。言^二忠直之人、皆在^二顯位^一、復有^二嬴餘賢俊^一、以為^中儲副^上。
 誠近^二夏禹指^レ魔取^レ士、一國之人、悉進^レ之也。一云、誠近^二夏禹
 所^レ稱、挙^二賢人之意也^一と見え、「魔」は指図する意。ただし、「禹
 魔」の用例は『楚辭』にしか見当たらず、禹に関する伝説などにも
 確認できない。なお、後の『楚辭集注』に朱子の注では「禹魔、未詳」
 とあり、清の蔣驥が『山帶閣註楚辭』で「禹魔、疑^二楚王車旂之名
 一、禹、或羽字之誤也」と注した。また、『藝文類聚』(卷十一)「帝
 王部一・總載帝王」に引かれた『管子』「桓公問」に「禹立^二諫鼓
 於朝^一、而備^レ訊也」と見え、「禹鼓」と似ている発想か。底本では「虞」
 に作るが、小島注通りに、文脈上通じないので、神宮文庫本によつ
 て「魔」と改めて、ひとまず「禹のようにさし旗を立てて、人材
 を招く」意を取る。

○堯衢―堯の衢室。「衢室」は、政を聞くところ。ここでは、堯が衢
 室で庶民の話すことを聞く典故を踏まえて、遍く意見を聞く意。前
 掲『藝文類聚』(卷十一)「帝王部一・總載帝王」に引かれた『管子』「桓
 公問」に「堯有^二衢室之問^一、下聽^二於民也^一とある。用例が少ないが、
 袁映(玄宗)「神岳舉賢良方正策」(『文苑英華』卷四百八十一)に
 ある「況周頌^二禹膳^一、列坐^二堯衢^一、此優^二賢之至也^一」は一例として
 あげられる。なお、李嶠「謝恩勅許致仕表」(同書卷六百四)に「忘
 機求^二漢水之翁^一、擊壤就^二堯衢之老^一、歌^二太平而永日、飲^二聖澤
 而窮年^一」とあり、李嶠文章での「堯衢」は堯の治下の通りをいい、
 「擊壤」の典故から由来する言葉だと考えられる。ここでは、「坐」
 という動詞が用いられ、また賢才を求めるといふ文脈のもとなので、
 「衢室」の意を取るべきである。なお、『経国集』に収録した奈良
 朝の刀利宣令の対策文にも「執^二禹魔^一而招^レ能、坐^二堯衢^一而訪^レ賢」
 と見える。

15 鼓腹擊壤の民、紫陌に抃舞し、負鼎鉤璜の佐、丹墀に接武す。

○鼓腹―腹鼓を打つ。食足りて満足するさま。『莊子』(外篇)「馬蹄」

を出典とする。「夫赫胥氏之時、民居不^レ知^レ所^レ為、行不^レ知^レ
 所^レ之、含^レ哺而熙、鼓^レ腹而遊、民能已^レ此矣。及^レ至^二聖人一、
 屈^二折^一札樂、以^レ匡^二天下之形^一とある。もとはまだ札樂が普
 及しなかった上古の素朴で憂いのない生活を形容する言葉であ
 るが、一般的に百姓が太平を楽しむ治世を讃える表現でもある。
 例えば、陳子昂「諫刑書」に「今天下百姓、抱^レ孫弄^レ子、鼓^レ
 腹、以^レ望^二太平之政^一矣」とある。『懷風藻』には、「鼓腹太平日、
 共詠^二太平風^一」(調忌寸老人「三月三日応詔」28)とあり、天
 皇の治世を賛美する表現として用いられている。

○擊壤―「鼓腹」と同様、太平無事を形容する言葉として用いら
 れる。壤と呼ぶ土製の樂器を撃つこと。一説に、地を撃つこと。
 また、一説に、壤は木製で履物の形をしている。堯の時、天下
 が太平であり、老人が壤を撃つ故事をいう。『藝文類聚』(卷
 十一)「帝王部・帝堯陶唐氏」に引かれた『帝王世紀』に「帝
 堯陶唐氏、……(中略)天下大和、百姓無^レ事、有^二五十老人
 一撃^二壤於道^一、觀者歎曰、大哉帝之德也。老人曰、吾日出而
 作、日入而息、撃^二井而飲^一、耕^二田而食^一、帝何力^二於我^一哉」と
 ある。謝靈運「初去郡」(『文選』卷二十六)に「即^二是羲唐化^一、
 獲^二我擊壤情^一」、李善注「周處風土記曰、擊壤者、以^レ木作^レ之、
 前廣后銳、長四尺三寸、其形如^レ履、將^レ戲、先側^二一壤於地^一、
 遙^二於三四十步^一、以^二手中壤^一撃^レ之、中者為^二上部^一」と見え、
 壤の遊び方としては、まず壤の一つを地におき、三四十歩離れ
 て、ほかの一つをこれに投げあてるといふやり方の遊戲だそう
 である。張正見の詩に「小臣慚^二藝業^一、撃^二壤慕^二懷鉛^一」(「御幸
 樂遊苑侍宴」)、「幸承^二濫吹末^一、撃^二壤自為^レ歌^一」(「從籍田應衡
 陽王教作」)とあるように、侍宴詩で君王賛美に用いられている。
 『懷風藻』にも「共遊^二聖主沢^一、同賀^二擊壤仁^一」(大伴旅人「初
 春侍宴」44)、「幸陪^二濫吹席^一、還笑^二擊壤民^一」(大博士守部連
 大隅「侍宴」78)などと挙げられる。

○抃舞―拍手して調子を取りながら踊る。「抃」は手を打つ。底

本に「舞」の字がないが、三・神本によつて補った。潘岳「藉田賦」(『文選』卷七)に「動容發音而觀者莫不_レ_レ舞乎康衢」_レ謳吟乎聖世とある。牛鳳及「和受閔温洛」(『藝文類聚』卷八「山部下・洛水」)に、「微臣矯弱翮、_レ扑舞接鸞鷟」、岑義「侍宴安樂公主山莊應制」に「誠願北極拱堯日、微臣扑舞詠康哉」などがあるような、治世を詠唱する場合に用いられる用例が数多く確認できる。

○紫陌—京の道。「陌」は郊外の小道。「紫庭」「紫闕」「紫閣」などのように、「紫〇」とは都・朝廷のものをいう。なお、「紫」と「丹」の色対が多うされ、前掲大日奉首名の対策文にも「名薰紫霄之上、道光_二丹闕之前_一」と見える。

○負鼎—伊尹が鼎を背負つて湯に自薦する故事による。帝王を補佐する喩。「史記」「殷本紀」に「伊尹、名阿衡。阿衡欲_レ湯而無_レ由、乃為_二有莘氏媵臣_一、負_二鼎俎_一、以_二滋味_一說湯、致_二于王道_一」と見える。『経国集』に収録された百倭麻呂慶雲四年(七〇七)九月八日の対策文にも「負_二鼎朝殷_一、扣_二角入齊_一」とある。

○釣璜—太公呂望が釣りをして璜玉を得た話。君主が賢臣を得、臣下が明君を得ることの喩。『藝文類聚』(卷十)「符命部」に「尚書中候曰、呂尚釣_二璜谿_一、得_二玉璜_一、刻曰、姬受_レ命、呂佐_レ旌」_一と見える。前掲刀利宣令の対策文に「是知釣璜同載、木運祚_二於七百_一、捐度成_レ佐、金精滅_二於二世_一」と見える。

○接武—武は足跡。「接武」には二つの意味を持っている。一つは、古、堂上での歩み方。『禮記』「曲禮上」に、「堂上接_レ武、堂下布_レ武」とあり、鄭玄は「接武」に「武、迹也。迹相接、謂_二每移足半蹠_レ之」と、「布武」に「謂_二每移足各自成_レ迹、不_二相蹠_一」と、それぞれ注した。鄭玄注によれば、「接武」とは、疾趨せずに、後足が前足の跡の半を踏むように歩むことをいい、小股で細歩徐行するような堂上での礼儀的な歩き方として理解してよい。時代がやや遅れるが、權德輿(七五九—八一八)「酬崔千牛四郎早秋見寄」に「聯_二鑣長安道_一、接_二武承明宮_一」とあり、崔四郎と長安の道で馬を並べて乗り、

同僚として一緒に承明宮で小股で歩むという意味である。一方、「接武」は、足跡が相接する・密接する意で、転じて、人が多い形容でもある。『抱朴子』「外篇・崇教」に「是以遐覽淵博者、曠_レ代而時有。面牆之徒、比肩而接_レ武也」と見える。『魏書』(卷六十五)「李平傳」にも「異人相趨_二於絳闕_一、鴻生接_二武於儒館_一」とある。本対策文では、「天子を補佐する賢臣たちが宮殿に徐行する」、あるいは「宮殿に歩くとき足跡が相接するほど、補佐の賢臣たちが多い」と、「接武」が両方の意味とも取れる。

○丹墀—丹の漆で塗った階前の庭。天子の庭は殿階の下を赤く塗るからいう。張衡「西京賦」(『文選』卷二)に「右平左城、青瑣丹墀」、李善注「漢官典職曰、丹漆_レ地、故稱_二丹墀_一」、呂向注「丹墀、階也、以_二丹漆_一塗_レ之」と見える。鮑照「舞鶴賦」(『文選』卷十四)に「唳_二清響于丹墀_一、舞_二飛容于金閣_一」、呂向注「丹墀、階也」と見える。前掲刀利宣令の対策文に「執_二禹麾_一而招_レ能、坐_二堯衢_一而訪_レ賢。逃_二周避漢之臣_一、雁行_二於丹墀_一。遊_二穎隱箕之夫_一、鱗次_二於絳闕_一」と見える。ほかに、「懷風藻」に収録された箭集蟲麻呂「侍讌」(81)には「紫殿連珠絡_二丹墀_一、莫草榮」_一とある。

17 風を帝王の代に驅り、俗を仁寿の郷に駕す。

○驅風帝王之代—風化を古の帝王の治世のそれに追いかける意。

○駕俗仁寿之郷—仁徳があつてまた長寿の里の世俗と同じように、世俗を導いて驅ける意。王融「永明十一年策秀才文五首・其三」(『文選』卷三十六)に「故能出_二人於阡危之域_一、躋_二俗於仁壽之地_一」、李善注「漢書、王吉上疏曰、陛下驅_二一世之民_一、躋_二仁壽之域_一、則俗何以不_レ若_二成康_一、壽何以不_レ若_二高宗_一也」と見える。

18 芻詞を博採し、幽介を側訪せむと欲したまふ。

○博採芻詞—身分の低い人の言論を含めて、広く意見を取り入れ

る意。「芻詞」とは、薪取りのことば、身分の低い人の言論。「芻」は「芻」に通じる。『詩経』「大雅・生民之什・板」に「先民有言、詢于芻蕘」とあり、毛傳「芻蕘、薪采者」と見える。唐太宗の「帝範」に「納諫」に「言之而是、雖在僕隸芻蕘、猶不可棄也」と見える。「芻詞」の用例が見当たらないが、「芻言」「芻議」などと同様で、草を刈る人のことば、賤者の言論をいう意味である。梁簡文帝「大法頌」(『廣弘明集』卷二十)に「諫鼓高懸、芻言不棄」とある。『經国集』に収録された大神虫麻呂のもう一篇の対策文にある「廣造芻蕘、傍詢政略」と、天平三年藏伎美麻呂の対策文にある「爰及芻蕘、廣垂下聽」とも、身分の低い人の言論を含めて、広く意見を取り入れる意である。

○側訪幽介―身分が低くて世を離れる隠者を謙遜に訪ねる。「幽介」は身分の低い、世と離れる人。謝莊「月賦」(『文選』卷十三)に「臣東鄙幽介、長自丘樊、味道慚學、孤奉明恩」、劉良注「自言東邊幽、賤孤介之人、長自丘園藩籬之中」と見える。「介」は獸のつれないもの、「孤介」「狷介」の意。「側」はいやしい・ひどい意を持ち、ここでは身分を低くして、敬意を表す意。『史記』「孟子傳」に「適趙、平原君側行、徹席」とあり、司馬貞の索隱では「謂側行而衣徹席為敬、不敢正坐、當賓主之禮也」と見える。「側行」は側に避けて行くこと、謙遜の意を持つ。ほかに、范曄「逸民傳論」(『文選』卷五十)に「光武側席幽人、求之若不及」とあり、光武帝が謙遜の意を表すために、野に隱遁している賢者の側の席に坐するという意味である。本対策文での「側訪」も同様に理解してよからう。

19 夫れ以みれば、時は浮沈を異にし、運は否泰を分つ。

○浮沈―浮くことと沈むこと。榮枯盛衰の喩。時勢につれて変遷することの喩。司馬遷「報任少卿書」(『文選』卷四十一)に「故且從俗、浮沈、與時俯仰、以通其狂惑」、呂延濟注「隨時吉凶、高下以生也。浮、吉。沈、凶。俯、下。仰、高也」と見える。また阮籍

「詠懷・其十六」(同書卷二十三)に「輕薄間遊子、俯仰浮沈」、李善注「輕薄之輩、隨俗浮沈」と見える。なお、「神」本では「淳澆」に作る。「淳澆」とはあつちものとうすいもの、民風をいう場合には、淳朴な風俗と輕薄な風俗をさす。『陳書』(卷二十四)「周宏正傳」に「夫文質遞變、澆淳相革、還樸反古、今也其時、魏書」(卷一百八之十一)「志・禮」に「而淳澆世殊、質文異設、損益相仍、隨時作範」などに見える。ここで「淳澆」も通じるが、一先ず底本に従う。

○否泰―泰否。否塞と通泰との運命。否と泰とは共に易の卦の名で、否は天地が交わらず万物の通じないかたち、泰は天地が交わり万物が通じるかたち。陸機「贈馮文熊遷斥丘令」(『文選』卷二十四)に「否泰苟殊、窮達有違」とある。

20 文質の統は茲に別れ、張弛の宜は同じからず。

○文質の統―底本では「統」に作るが、文脈を考えた上で、「三」「神」本によって「統」と改めた。「文質の統」は「文」か「質」かによって礼制を統一することをいう。「文」は文華、「質」は質朴。礼制改制の原理となったもの。『論語』「為政」に「子張問、十世可レ知也。子曰、殷因於夏禮。所損益、可レ知也。周因於殷禮。所損益、可レ知也。其或繼周者、雖百世、可レ知也」とあり、子張がこれから十世代先までの礼制がどのようなかわるかと孔子に質問した。孔子は、殷は前代の夏の礼制に基づきながら変わり、周は前代の殷の礼制によりながら変わったので、その「損益(減らすところと増やすところ)」が分かり、百代の先までの礼制の在り方は大体わかるのだ、と答えた。何晏注に孔安国と馬融の注が引用され、「孔(安国)曰、文質禮變。馬(融)曰、所因謂三綱五常、所損益謂文質三統」と見える。「損益」はつまり、「文」と「質」とのどちらかを減らしたり増やしたりするような礼制に関する改革をいう意味である。後世では、一般的に商が質を、周が文を尚ぶとされ、

王朝の交替に従って循環して用いられる。ちなみに、「三統」とは、夏の人統（建寅の月を正月とし、服色は黒を尚ぶ、黒統ともいう）、殷の地統（建丑の月を正月とし、服色は白を尚ぶ、白統ともいう）、周の天統（建子の月を正月とし、服色は赤を尚ぶ、赤統ともいう）のことで、また王朝の交替に従って循環して用いられるものである。

詳細は識緯的な性格を色濃く帯びている『春秋繁露』『三代改制質文』『白虎通』『文質』『三正』などを参照。『藝文類聚』にも「質文」（卷二十二「人部六」）の部が立てられている。干寶『晋武革命論』（『藝文類聚』卷十三「帝王部三・晋武帝」）に「帝王之興、必俟天命、苟或代謝、非人事也。文質異時、興建不同」、魏明帝詔（同書卷五十三「治政部下・薦挙」）に「世之質文、隨教而變、傳咸紙賦」（同書卷五十八「雜文部四・紙」）に「蓋世有質文、則治有損益」などがあるような用例から見れば、王朝の交替に従って「文」と「質」が変換するものと知れる。この対策文では、文か質か、どちらを以て統制するかは、時運によるものという意味である。また、時代が遅れるが、菅原清公が「宗廟禘祫」と題した策問（『経国集』「策下」延暦二十（八〇一）年）に「斯知、質文之變、隨時之義大哉、損益之事、追世之理深矣」と見える。また、弘仁十四年（八三三）十二月甲申（四）、淳和天皇の詔書に「文質相變、損益不同」（『類聚國史』卷七一「歳時二・元日朝賀」）とある。

○張弛之宜——『禮記』『雜記下』に「張而不弛、文武弗能也。弛而不張、文武弗爲也。一、張、弛、文武之道也」と見える。ここでは、政治上の張り弛みをいう。政治上張り弛み、どちらを取るかは時勢によるものだという意。崔駰「達旨」（『後漢書』卷五十二「崔駰傳」出）に「道無常稽、與時張弛」とある。梁武帝「令所在條陳時政詔」（『梁書』卷二「武帝本紀」）に「頃因革之令、隨事必下而張弛之要、未臻厥宜」と見える。『続日本紀』「養老三年（七一八）十月辛丑（十七）」元正天皇の詔に「降至近江之世、弛張悉備」、また「宝龜六年（七七五）八月庚辰（十九）」太政官の奏に「臣聞、三代弛張、百王沿革、隨時損益、事在利人」などと見える。

21然らば則ち、四乳皇運に登るに、三微の虐政を経き、重華帝世を踐むに、二皇の淳風に近かりき。

○四乳——文王は乳が四つあることと伝わっている。『藝文類聚』（卷十二）「帝王部二・周文王」に「春秋元命苞曰、文王四乳、是謂含良、蓋法酒旗、布恩舒明。宋均注曰、酒者、乳也。能乳天下、布恩之謂也」と、また「帝王世紀曰、文王昌龍顏虎肩、身長十尺、胸有四乳、敬老慈幼、晏朝不食、以延四方之士」と見える。

○三微——ここではたびたび朝廷に召される意。「微」は朝廷から召すという意味で、「三」は三度ではなく、回数にかかわらず何度も、回数多いことを形容する言葉である。「董仲舒伝」に「當此之時、紂尚在、上、尊卑昏亂、百姓散亡」とあり、また、次の「虐政」と合わせてみれば、文王が王位に就く前後、紂の治下で百姓が朝廷に召され、徭役や兵役などで苦しむという意と考えられる。「三」「神」本には「微」に作るが、「三微」なら文脈に通じないので、ここでは底本に従う。

○重華——舜のこと。舜の目に瞳が二つあることによる。『藝文類聚』（卷十二）「帝王部一・帝舜有虞氏」には、『帝王世紀』が引かれて、「帝有虞氏、姚姓也、目重瞳、故名重華」と見える。何晏「景福殿賦」（『文選』卷十一）に「欽先王之允塞、悅重華之無為」とある。和銅四年（七一）葛井諸會の対策文に「重華節恣之制乃敬、丕天之法亦將謨」と見える。

○二皇——太古の帝王の伏羲氏と神農氏。張衡「東京賦」（『文選』卷三）に「挾三王之越超、軼五帝之長驅、踵二皇之遐武、誰謂駕遲而不能屬」、薛綜注「二皇、伏羲・神農也」とある。

○淳風——淳朴な風俗。『続日本紀』「養老二年（七一八）十二月丙寅（七）」元正天皇の詔書に「広開至道、遐扇淳風」と見える。

22 淳風の時に必ず須らく垂拱すべく、唐政の世に何ぞ経営せざる。

○経営―国の事業を営む。『詩経』「大雅・蕩之什・江漢」に「江漢湯湯、武夫洸洸。經_レ營_二四方_一、告_二成於王_一」とある。

23 聖王は世と与に汚隆し、黎庶は君に従ひて低仰す。

○汚隆―低いところと高いところ。又、衰えることと盛んなこと、世に顕れることと隠れること。「汚」は「汙」に同じ、凹、ひくい、窪地、溜まり水。「隆」は凸、高い、山の中央の高く盛り上がった所。『晉書』(卷三十一)「后妃列傳」に「晉承_二其末_一、與_レ世汚隆_一」とある。『魏書』「世宗紀」(卷八)に「聖人濟_レ世、隨_レ物汚隆、或正或權、理無_二恒在_一」、同書「蕭寶夤傳」(卷五十九)に「故雖文質異_レ時、汚隆殊_レ世、莫_レ不_レ寶_二茲名器_一、不_レ以_レ假_レ人_一」とある。『列仙傳』「馬丹」では馬丹賛に「馬丹官_レ晉、與_レ時汚隆_一」と見える。本対策文のほか、『經国集』「策下」に収録された紀真象の天平宝字元年(七五七)対策文に「不然何以驗_二人事之終始_一、究_二德教之汚隆_一」と、白猪廣成の対策文に「猶懼、聃丘之教未_レ備_二汚隆_一、玄儒之旨有_レ舒_二雄雌_一」と、栗原年足の延暦二十(八〇一)年二月二十五日の策文にも「滋革殊_レ途、汙隆異_レ等」と、三例が見られる。

○低仰―低いところと高いところ。又、高低の決まらないこと。潘岳「西征賦」(『文選』卷十)に「倦_二狹路之迫隘_一、軌崎嶇以低仰_一」、李周翰注「言_二狹路崎嶇登頓_一、故使_二車軌高低_一」、司馬相如「大人賦」(『史記』「司馬相如列傳」)に「駕_二應龍象輿之螭暑透麗_一兮、騖_二赤螭青虬之蚴蟉蜿蜒_一。低_レ仰_一、(仰)に通じる)天矯、据以驕驚兮、拙折隆窮、螭以連卷」などある用例からみれば、「低仰」はたかさについている場合が多いが、この対策文では、身のこなし方の「俯仰」に近いだろう。右「浮沉」条で挙げた用例を参照。この対策文では、君王は時勢とともに浮沈し、庶民はまた君王に随順して浮沈する意。

24 若し能く有虞無為の化を追ひ、隆周勤己の治に則る。

○隆周―強くて盛んな周王朝をいう。王僧達「和琅邪王依古」(『文選』卷三十一)に「隆_二周_一為_二敷澤_一、皇漢成_二山樊_一」と見える。駱賓王「至分陟」に「至今王化美、非_二獨在_二隆周_一」とある。

○勤己―張衡「東京賦」(『文選』卷三)に「躬_二三推_二於天田_一、修_二帝籍之千畝_一。供_二禘郊之粢盛_一、必致_二思乎勤_レ己_一」と見え、天子が自ら耜を三度手で推して自分の籍田を耕し、また天を郊外に祭り、穀物を盛った器を供え、自ら怠惰を戒める、という意味である。張銑注「勤_レ己_一、戒_二怠惰_一也」とあるように、「勤己」とは自ら怠惰を戒め、自ら励んで働き、自分を厳しく要求する意である。ほかに、魏の劉邵の撰「人物志」(卷下)「釋争」(『見書目録』に出)に「内勤_レ己_一以自濟、外謙讓以敬懼_一、劉昫(南北朝西涼)注「獨處不_レ敢_レ為_レ非_一、出門如_レ見_二大賓_一」と見える。用例は多くない。なお、底本では「勤」に作るが、文王が日昃まで食を取らずに治政に努める文脈で、「三」「神」本に従って「勤」と改めた。

25 廉平を表し、礼讓を宣ぶ。

○廉平―清廉で公平。『史記』「孝文本紀」に「上書曰、妾父為_レ吏、齊中皆稱_二其廉平_一」とある。

○礼讓―礼儀厚く、人に謙る。『史記』「宋微子世家」に「襄公既敗_二於泓_一、而君子或以為_レ多。傷_二中國闕_二禮義_一、褒_レ之也。宋襄之有_二禮讓_一也」と見える。

26 賁帛して其の英俊を旌し、懸棒して其の奸回を絶つ。

○賁帛―賢士を招くために、帝王が束帛を飾って賢士に贈ること。また、その飾った帛をいう。「賁」はかざる。『易経』「賁」卦の卦文を典とする。「賁、亨。小利有攸往。(賁は、亨る。小しく往く攸有るに利し。)…(中略)六五、賁于丘園、束帛戔戔。吝、終吉(六五、丘園に賁る。束帛戔戔たり。吝なれど

も、終には吉」とある。張衡「東京賦」(『文選』卷三)に「招有道於側陋、開敢諫之直言。聘丘園之耿潔、旅束帛之芟芟」、薛綜注「招、明也。有道、言使下郡國中於側陋之中、舉有道之士而用上之也。直言、謂直諫者也。耿、清也。旅、陳也。謂有清潔者也。言丘園中有隱士、貞潔清白之人、聘而用上之。束帛、謂古招士必以束帛加璧於上」。周易曰、六五、賁于丘園、束帛芟芟。王肅云、失位無應、隱處丘園。蓋蒙闇之人、道德彌明、必有束帛之聘也。芟芟、委積之貌」と見える。薛綜が引いた王肅の易経注は南宋の頃既に散逸したが、王肅注によれば、「六五」の卦象は、丘園に隱遁している賢士が後に君主によつて束帛を以て招かれることを予兆する吉の卦である。張衡「東京賦」での文句も『易経』の王肅注の系譜を引く表現である。ちなみに、「束帛」は、一束の帛。古代、帛の両端から相向つて巻き、共に一兩と成し、五兩を一束とし、聘問の礼物として用いた。つまり、五匹十端の帛。『周礼』「春官・大宗伯」に「周制、凡贊、天子以鬯、諸侯執珪、孤執皮帛、卿執羔、鄭玄注「皮帛者、束帛而表以皮、爲之飾」、賈公彦疏「云「皮帛者、束帛而表以皮爲之飾」者、案、聘禮束帛加璧、又云束帛乘馬、故知此帛亦束」。束者、十端。每端丈八尺、皆兩端合卷、總爲五匹、故云束帛也」と見える。「束帛」は賢者を聘く礼物と知られる。その上に、表に皮で飾つた束帛は、いわゆる「賁帛」である。「賁帛」の用例としては、梁元帝「薦鮑幾表」(『藝文類聚』卷五十三「治政部下・薦舉」)に「旌蒲出魯、賁帛歸齊、頌聲既興、盛業斯在」とあり、李嶠「上雍州高長史書」(『文苑英華』卷六百七十二)に「負書懷刺、方致維桑之禮。賁帛翹車、行枉錯薪之駕」と見える。

○懸棒—警告啓示のために、処刑用の棒を官庁にかけること。曹操の故事による。『魏志』(卷一)「武帝操」に「年二十、舉孝廉、爲郎、除洛陽北部尉、遷頓丘令、徵拜議郎」のところに、裴松之注に「曹瞞傳曰、太祖初入尉廨、繕治四門。造五色棒、縣門左右、各十餘枚。有犯禁者、不避豪彊、皆棒殺之」

と見える。宋軌の「諫設棒奏」(『隋書』卷二十五「志・刑法」)に、「昔曹操懸棒、威於亂時、今施之太平、未見其可」とある。曹操が豪族かどうかに関わらず、法に違反すれば、みな棒で打ち殺すという故事から由来するもので、「懸棒」という言葉は厳正で公平に法を執行する意味合いを持つているが、同時に、刑罰によつて政を行うので、仁徳によつて民を教化することを唱える儒家の施政理念からみれば、過酷というイメージも含まれている。中国の詩文では用例が極めて少ない。時代がやや遅れるが、韋應物(七三七―七九二)の「示從子河南尉班」に「立政思懸棒、謀身類觸藩」と見える。

○奸回—よこしま。「三」本では「曲」に作るが、「奸曲」も同じ意味である。『尚書』「泰誓下」に「崇信姦回、放黜師保」、孔安國傳「回、邪也。姦邪之人、反尊信之。可法以安者、反放退之」と見える。

28則ち金科濫れず、沙園恒に清く、九歲儲有り、千斯庾を積む。

○金科不濫—法令が度を過ぎないことをいう。「金科」は法令。「金科玉律」「金科玉条」も同様。揚雄「劇秦美新」(『文選』卷四十八)に「胤殷周之失業、紹唐虞之絶風、懿律嘉量、金科玉條、李善注「金科玉條、謂法令也、言金玉貴之也」と見える。『南齊書』卷三「本紀・武帝」では、齊武帝の賛に「威承景歷、肅御金科」とある。「濫」は乱れる、節度がない。『春秋左傳』「襄公二十六年」に「歸生聞之、善爲國者、賞不僭而刑不濫。賞僭、則懼及淫人。刑濫、則懼及善人。若不幸而過、寧僭無濫」と見える。

○沙園恒清—やや難解。おそらく策問での「園園空虛」と同じ意味だろう。「園」も「圀」もひとやの意味で、「沙園」でもひとやの意味だろう。「恒清」は、常に清い意、徐陵「孝義寺碑」(『藝文類聚』卷七十七)に「嘉禾自秀、浪井恒清」とある。「清」は一般的、井・池・川などを形容する時に用いられる。むしろ

ん、比喩としては、社会・風化などという。池や川などが清らかな時、その底にある沙などがかき混ぜられて湧き上がらないということでもある。「恒清」に因んで、「圉圉」を「沙圉」に変えたのだろう。なお、小島注では「沙圉恒清」は牢屋に罪人がいなく、いつも清潔という意味だと示したが、「沙圉」を「圉圉」に意改した。「圉圉」との常套的な組み合わせはやはり「空虚」「寂寥」、あるいは「生」である。ここでは、むしろ大神虫麻呂が言葉のあやを追求して意識的に「沙圉」を創ったのではないかと考えられる。

○九歳有儲―九年間の食糧が蓄えられる。『礼記』『王制』に基づく表現である。「國無九年之蓄、曰不足」。無六年之蓄、曰急。無三年之蓄、曰國非其國也」と見える。

○千斯積庾―たくさんの農作物が蓄えられる意。『詩経』『甫田之什・甫田』に基づく表現である。「曾孫之稼、如茨如梁。曾孫之庾、如坻如京。乃求千斯倉、乃求萬斯箱」と、鄭玄箋「庾、露積穀也」とある。「斯」は語調を整える助詞で、「千斯」は数多い形容である。「積庾」ははたけに露積してある穀物農作物などという。「易林」「大有」に「升。野有積庾、穡人駕取。不逢狼虎」。暮歸「其宇」とある。また、『國語』（卷二）「周語中」に「野有庾積、場功未畢」と、逆順の「庾積」が見られる。

29 水魚犯さず、共に南風の薫を喜び、門鵲喧しきこと莫く、咸東戸の化を懷ふ。

○水魚―君臣の相親しむことをいう。『列女傳』（卷六）「辯通傳・齊管妾婧」に「其妾笑曰、人已語君矣、君不知識耶。古有白水之詩。詩不云乎、浩浩白水、儵儵之魚、君來召我、我將安居、國家未定、從我焉如。此甯戚之欲得仕國家也」とある。『列女傳』にあげた古詩の「白水詩」は、国に登用してほしい気持ちが現れている。後に、『蜀志』（卷五）「諸葛亮」に「関羽張飛等不悦、先主解之曰、孤之有孔明、猶魚之有水也。願諸君勿復言」とあるように、和睦な君臣関係をいうようになっていく。『貞觀政

要』（卷二）「論求諫」に「惟君臣相遇、有同魚水、則海内可安」と見える。

○南風の薫―帝王の素晴らしい教化、帝徳の喩。「南風」は舜の作った曲。『孔子家語』（卷八）「辯樂解」に「昔者舜彈五絃之琴、造南風之詩。其詩曰、南風之薰兮、可以解吾民之愠兮、南風之時兮、可以阜吾民之財兮。唯修此化」と見える。任昉「奉荅敕示七夕詩啓」（『文選』卷三十九）に「雖漢在四世、魏稱三祖上、寧足以繼想南風、克諧中調露上」と見える。

○門鵲莫喧―一般的にカササギの鳴き声は吉兆とされているが、時代を遡ると必ずしもそうと言い切れない場合がある。古い例を挙げると、『楚辞』『九章・涉江』に「燕雀烏鵲、巢堂壇兮」と見え、王逸注「燕・雀・烏・鵲、多口妄鳴、以喻讒佞」。言「楚王愚闇、不親仁賢而近中讒佞也」の通り、鵲は烏・燕・雀と同じく、いずれも口やかましい小人輩を譬えた表現である。本対策文では、対を成す前句の「水魚不犯」が典故を踏まえた表現なので、ここも典故を用いたものと考えるのが妥当ではないかと思われる。そこでまず想起されるのが『莊子』の「鵲起」である。「鵲起」の一文は現存本『莊子』には見えないが、『文選』（卷三十）に収録された謝朓「和伏武昌登孫權故城」に「鵲起登吳山、鳳翔陵楚甸」、李善注に「莊子曰、鵲上城之堦、巢於高榆之顛、城壞巢折、陵風而起。故君子之居時也、得時則義行、失時則鵲起」と見えるほか、『藝文類聚』「木部上・榆」（卷八十八）と「鳥部下・鵲」（卷九十二）にも引用されている。それは「時を失うとき、君子が鵲のように飛び立つ」という意である。裏を返せば、「時を得ている場合、鵲は喧しく飛び立つこともしない」、すなわち君子がよい治世にめぐり合って時を得ていることを言うことになる。これらを考え合わせ、ここでの「門鵲莫喧」は、口やかましい小人輩も静かになり、君子がよい時にめぐり合うような、政治清明の治世

の喩と解したい。なお、「門鵲莫喧」の出典について、小島氏は『補篇』で二案を提示したが、一つは前述した『莊子』の「鵲起」であり、もう一つは『詩経』の「鵲巢」である。「鵲巢」の案は次句と関わっているもので、後に詳述する。

○咸懷東戸之化——底本では「東后」に作る。「東后」とは、東方の諸侯。『史記』「封禪書」に「尚書曰、舜^{あきらかにす}在^二璇璣玉衡^一、以齊^二七政^一、……（中略）柴、望^二秩于山川^一。遂覲^二東后^一。東后者、諸侯也」と見える。小島氏は底本の「東后」に従って、「帝舜の東方の諸侯への感化」と解釈し、これと合わせて、前句の出典を「鵲巢」と解するのが適当と主張している。氏の論をやや詳細に述べると、まず「鵲巢」は「国風・召南」の冒頭の歌である。「毛詩序」に「鵲巢騶虞之德、諸侯之風也、先王之所^レ以^レ教、故繫^二之召公^一」と見えるので、「鵲巢」に歌われた徳化（徳）が諸侯の教化（風）だと分かり、氏はこの句の全体を、「鵲が静かに巢にゐること」を通じて、『毛詩』序の「鵲巢」へ及び、これが更に「諸侯の風」へと結ばれ、それが更に東方の諸侯、つまり「東后の化」へと聯想の糸がつながったのではなからうか」と解釈するのである。ただし、より正確に言えば、「鵲巢」詩に歌われているのは諸侯の夫人の徳である。それは、この詩に対する毛伝の解題に「鵲巢、夫人之徳也」と見えることから明らかである。もとより、「鵲巢」と「騶虞」は「召南」の冒頭と末尾の歌であり、「召南」を代表しているので、「鵲巢騶虞の徳」はすなわち「召南の徳」、「鵲巢騶虞の徳は、諸侯の風なり」という句は、「召南」全般が諸侯の教化を歌うことを指しているのである。また、「鵲巢」詩の内容は婚礼のことであり、鵲を結婚と結びつけるポイントは、詩句の「維鵲^{これ}有^レ巢^一」とあるように、「鳴く」という点ではなく、「巢を作る」という点にあるのである。とする^二と、「鵲巢」と「門鵲莫喧」との間に直接の関係は認めがたいと言わざるを得ない。ここで「東后」ではなく、「三」「神」本によって「東戸」と改める案を提起したい。「東戸」とは上古の君主の東戸季子である。『淮南子』「繆稱訓」に「昔東戸季子之世、道路不^レ拾^レ遺、

未^二相餘糧宿^一諸晦首^一。使^二君子小人^一各得^二其宜^一也^一」、高誘注に「東戸季子、古之人君」と見える。陶淵明「戊申歲六月中遇火」詩に「仰想^二東戸時^一、餘糧宿^二中田^一。鼓腹無^レ所思、朝起暮歸眠^一」とある。ほかに、魏徵の「既欣^二東戸日^一、復詠^二南風篇^一」（奉和正日臨朝）『文苑英華』卷一百九十、一本には「東日戸」に作る）、馬懷素の「幸齊^二東戸慶^一、希薦^二南山寿^一」（九日幸臨渭亭登高應制得酒字）などのような、宴会詩や奉和詩に用いられる例があげられる。対句の「南風之薰」を合わせて見れば、この句に用いられたのも君主の典故だと考えるべきである。また、底本では「盛懷」に作るが、「共喜南風之薰」との対句関係を踏まえて、「三」本に従って「咸」と改める。結論としては、この句は「喧しい鵲も鳴かない政治清明な治世では、みなが上古君主の東戸季子のようなすばらしい教化をしみじみと心に思うのである」の意と解する。

【まとめ】

この対策文は四段落に分けられる。まず第一段落で文字のなかつた太古から、文字によって帝王の事績が記録される現在まで歴史を眺めている。次に第二段落では、このような歴史を受け継いだ現今の天皇が素晴らしい政治を行っていると、天皇を賛美している^四。そして、第三段落から策問を実質的に答え始めて、最初は策問の第一問に対して答え、舜と文王との政治が違う理由は、それぞれ恵まれる時勢が異なつたからだとして述べている。この見解は董仲舒の答えと同じ方向を示しているが、董のように、無為が優位するとはつきり答えることはしなかったのである。最後に、第四段落では、具体的な治国方略を述べ、策問の第二問に答えた。しかし、具体的な治国方略とは言え、形式化された抽象的な一般論に過ぎない内容である。当時はやはり典故をちりばめるような書き方が評価された故ではないかと考えられる。

小島氏の指摘の通り、四六言の駢文体と定型化した表現は、奈良朝の対策文の特徴である^五。この対策文にも同様なことが見られる。特に、パターン化された表現の中で、現存する中国の詩文であり見当たらない表現が散見していることは興味深いと思われる。対策文を作成するための類書のような参考書目が存在していたことが推定できるが、それらの参考書目が散逸した可能性も考えられる。今後上代人の表現を考える際、その点を念頭に入れなければならない。『経国集』に収録された上代人の対策文の全体像を明らかにすることは、更なる考察範囲の拡大とより深化した思考が求められるが、それらの検討は他日に期す。

注 釈

一 『群書類従』に収録された『経国集』巻二十「策下」の目録によれば、十三人各二篇ずつの計二十六篇だが、現に、白猪広成の名のもとで三篇も収録されている。そのなかの二篇は同じ策問によるものである。また、白猪広成と船連沙弥麻呂の対策文の中には重複した部分もある。

二 『国風暗黒時代の文学・上』、塙書房、一九六八年、二〇八―二二三頁。
『国風暗黒時代の文学・補篇』塙書房、二〇〇二年、四八八―五一六頁。
『論語』「八佾」による。「韶」は舜の音楽。舜は禪讓を受けて、無為にして天下が治まるので、その音楽には平和の気がみなぎっており、美と善を尽くす。「武」は周の武王の音楽。武王は武力で天下を取ったので、その音楽には壮大の中にも殺伐の気が含まれている。善を尽くさずというのはそのためである。文王の事業が武王によって継承されたので、孔子の武王に対する評価はここで文王の評価にも用いられた。つまり、文武二王の政治は舜の無為の政治ほど優れていない。

四 ここで興味深いのは、第一段落で顧みたのが中国の歴史であるが、第二段落で賛美するのは日本現今の天皇であるということである。これは、『懷風藻』の冒頭に「逸聴^二前修^一、遐覲^二載籍^一、襲山降^レ蹕之世、樞原建^レ邦之時、天造草創、人文未^レ作」と、日本史のみを概観することとは異なる。

五 注二を参照。

